

奈良県の近代和風建築とその設計者

はじめに 奈良文化財研究所では、平成21年度に奈良県からの受託事業として、奈良県内に所在する明治以降に伝統的技法及び意匠を用いてつくられた住宅・商業建築・公共建築・宗教建築等（以下「近代和風建築」という。）について、その所在地、形態・意匠及び保存状況等に関して調査をおこなった。本稿では、奈良県の近代和風建築の概況について報告する。

公共建築 近代化の象徴ともいえる鉄道では、奈良の顔ともいえる存在の旧JR奈良駅（奈良市、昭和9年、増田誠一）がある。屋根以外の構造は鉄筋コンクリート造で、宝形屋根に相輪を備え、寺院の塔を意識した意匠である。コンクリートによる和風表現や塔屋を設けることは近代和風建築における特徴のひとつである。また、奈良の主要な観光地を結ぶ近畿日本鉄道には、橿原神宮前駅（橿原市、昭和15年、村野藤吾）があり、大和棟民家をモチーフにした建物に、伝統的意匠風な幾何学模様を施している。

教育の近代化にともなう学校建築の例では、畝傍高校（橿原市、昭和8年、岩崎平太郎、図54）、鼓阪小学校（奈良市、昭和11年）がコンクリート造の和風建築である。畝傍高校は旧JR奈良駅と同様に正面玄関部で宝形屋根に相輪を載せた堂々たる建物である。また、桜井高校講堂（桜井市、明治37年）は木造による大空間を実現している。これらのほかにも、いわゆる木造校舎として春日小学校（山添村、明治36年）、宇太小学校（宇陀市、昭和11年）、旧菅野小学校（御杖村、昭和12年）などが現存している。

公共建築ではほかに、旧奈良県物産陳列所（奈良市、明治35年、関野貞）が重要文化財に指定されている。旧高



図54 畝傍高校（橿原市、昭和8年）

市郡教育博物館（橿原市、明治36年、橋本卯兵衛）、旧奈良県立図書館（大和郡山市、明治41年、橋本卯兵衛）は中央主体部に翼楼を備える平等院鳳凰堂をなぞらえた建物として同様の外観を呈している。その平等院鳳凰堂はちょうど明治35年から5年間の大修理がおこなわれている。

宗教建築 古代建築に目がいきがちな奈良の寺社建築においても良質な近代和風建築が所在する。長谷寺本坊（桜井市、大正8～12年、図55）は天沼俊一・阪谷良之進・岸熊吉によって設計され、復古的な外観に近代和風らしい装飾を施し、加えて講堂で無柱の大空間を実現している。春日大社貴賓館（奈良市、大正14年）も岸熊吉による設計であり、長谷寺本坊と同様、鋭い切り絵のような表現のシンメトリーな装飾は、当時の洋風表現に劣らない華麗な伝統和風建築を実現している。また、境内全体の造営として吉野神宮（吉野町、昭和2～4年、角南隆）、橿原神宮（橿原市、昭和15年）といった大事業が挙げられる。

明治末から戦前にかけて大きく成長した天理教の建築も近代奈良を語る上では欠かせない。敷島大教会（桜井市、昭和5年、図56）は畝傍高校と同じ岩崎平太郎の設計である。撞木造りの善光寺（長野県）のような巨大な正面構えに、屋根側面には破風を比翼に設け、圧倒的な存在感を示す。本場奈良の天理教建築に相応しい建物である。

県内では、キリスト教建築においても和風が採用されており、日本聖公会奈良基督教会教会堂（奈良市、昭和5年、大木吉太郎）は、玄関を春日造り風に屋根をかけ、内部の大空間を飾る欄間などには、菱格子など幾何学的な和風模様を多用することで、奈良におけるキリスト教建築のあり方を模索した様子が見えがえる。

住宅建築 志賀直哉旧宅に代表されるように、文人・墨客が活躍した奈良市高畑界隈は建築・庭園ともに優れた



図55 長谷寺本坊（桜井市、大正8～12年）

屋敷が建ち並ぶ。これらの屋敷では、通りからは落ち着いた佇まいを見せるが、その反対側では雄大な庭園に対抗しうる豪壮な建築となっている。また、県内の各地に岩崎平太郎や木津宋詮による住宅・茶室が点在し、白雲荘（吉野町、昭和2年）は吉野の山並みに浮かぶ金峯山寺を借景とした別天地を実現している。

商業建築 古都観光、大阪の奥座敷としての役割を果たしてきた良質な旅館も奈良の特徴として挙げられる。菊水楼（奈良市、明治24年・34年）は木造三階建て、様々な特徴ある床構えの客室がある。百楽荘（奈良市、昭和8～17年、泉岡宗助）は広大な敷地に様々な離れを点在させる。県南端の瀨峡にはそそり立つ断崖に古城の佇まいの瀨ホテル（十津川村、大正6年）がある。

奈良県の近代和風建築 近代建築の全国的な調査としては、近代化遺産総合調査と近代和風建築総合調査がおこなわれている。近代化遺産総合調査では土木遺産のほかに主として洋風建築が対象となり、奈良県内にも奈良女子大学旧本館（奈良市、明治42年、山本治兵衛）など優れた近代洋風建築が存在する。県内各地には銀行建築などで存在した。しかし、奈良県における近代建築の特徴は、和風建築への偏重という点がまず指摘できる。これについては、国家創成の地、つまり和風の原点という意識とともに、明治30年に施行された古社寺保存法にともなう古社寺修理によるところが大きいといえる。

古社寺修理技師と近代和風建築 奈良を拠点として活躍した建築家としては、岩崎平太郎と大木吉太郎を挙げることができる。

県内に多くの和風建築を残した岩崎平太郎は下市町に生まれ、京都において古社寺修理に携わり、この時に武田五一と知り合い、その後武田の下で働いた。武田は京

都大学建築学科の創設に関わり、教授を務めた。昭和9年からは法隆寺国宝保存工事事務所の所長を務め、岸熊吉等と仕事をしている。武田の奈良での作品としては法隆寺鶴文庫淵黙書堂（斑鳩町、昭和13年）がある。大胆な違い棚や簡潔な縁側天井などに近代和風と呼ぶに相応しいデザインを見てとれる。岩崎は武田と比較するならばより伝統に軸足を置いた作風といえる。

大木吉太郎は大和郡山市に生まれ、やはり古社寺修理に携わり、天沼俊一の監督の下に室生寺金堂修理（明治40～41年）で技師（技手）を務めている。奈良育英学園の建物（大正12～、現存せず）を数多く手がけるなど、キリスト教との関わりが強く、幅広い技量を持っていたことがうかがえる。

岩崎と大木は経歴からわかるとおり、古社寺修理とその監督等との関わりを通じて、技量を磨き上げた。そして、その古社寺修理の監督等も奈良において近代和風建築を数多く残すなど、古社寺修理と奈良の近代和風建築はほとんど一体といっても良いほどである。例えば、大正8～12年にかけて完成した長谷寺本坊の設計者である天沼俊一・阪谷良之進・岸熊吉の3人は、大正5～13年に金峯山寺本堂修理の監督を務めている。また、富貴寺地藏堂（川西町、昭和12年、図57）は大仏様を取り入れた小規模仏堂であるが、設計は東大寺南大門修理（昭和2～5年）の監督を務めた稲森賢次であった。

当研究所で平成20年度まで近代和風建築総合調査をおこなった京都府にしても、古社寺修理は近代和風建築に大きく関わっていた。奈良県はさらなる和風の源流への探索がおこなわれていたことで、観光地としての地域形成と相まって、良質な近代和風建築が建てられたといえる。

（黒坂貴裕）



図56 敷島大教会（桜井市、昭和5年）



図57 富貴寺地藏堂（川西町、昭和12年）